



京都支部

## 2014年度支部活動報告



1. <2014.04.19 総会講演要旨>
2. <2014.06.28 第1回例会講演要旨>
3. <2014.09.27 第2回例会講演要旨>
4. <2014.11.19 第3回例会講演要旨>
5. <2015.01.31 京都支部新年会>
6. <2015.03.07 第4回例会講演要旨>

### 1. 2014年度京都支部総会報告と講演要旨

「レーダーを使って大気を測るー信楽とインドネシアからの研究紹介ー」

講師：山本衛教授（京都大学 生存圏研究所）

2014年4月19日

支部総会は出席者20名、委任状13名で成立。今年の中川慶子支部長の支部長職2期目の最後の年になるので、その抱負を次のようにお話しになった。

「現在、少子高齢化がますます進行し、政治・経済も大きな変革の中にありますが、私たちのこの京都支部は、真面目に、ゆっくりと、みんなで話しあいながらこの1年間、会の運営に努めてまいりました。昨年度は特に世界に目を向けて取り組んできた感があります。今年も会の目的に沿った面白い企画を考えたいと思っています。また、会員を一人でも増やして、会員40人を切らないようにみんなで努力していきましょう。今年は改選の年に当たります。バトンタッチがうまくいきますように皆様よろしくご支援、ご協力方お願いいたします。」

その後、2013年度事業報告、会計報告、監査報告ならびにその他の活動が各担当から報告され、ついで今年度の事業計画、会計予算が承認された。例年にならってホームページの記事その他をまとめた冊子『2013年度京都支部活動報告』が配布された。また、JAUWのホームページが今年度から外注になり、リニューアルされた旨の報告があった。

昼食のあと、山本衛（やまもと まもる）教授の講演をお聞きした。昨年度のJAUW国際奨学生として来日したマレーシアのシティさん（Siti Husniah Chumiran）が、山本先生

のもとでレーダーによる大気観測技術の研修を受けたということもあり、そのご縁で、先生のお仕事、シテイさんの研修の内容などをお話ししていただくことになった。（シテイさんは、妊娠後期だったということもあり、予定を早めて帰国しなければならなかったが、山本先生の親切な指導のおかげで期待していた以上の成果をあげることができたとしても喜んでいらっしやった。）以下、その講演の要約である。

☆☆☆☆☆



今日はシテイさんの研修の内容をまとめてお話ししようと思っていたが、忙しくてまとめる時間がなかったので、彼女のことには少し触れて、あとは主に私の研究のことをお話する。

京大大学生存圏研究所はインドネシアに大きな観測装置を作り、大気の観測を行っている。同時にそこで国際学校を開いていて、色々な国から学生が講習を受けに来ているが、そこにシテイさんが出席していた。2012年夏にそこで講習会があり、私がレーダーのことを話したところ、彼女が関心を持ち、私のところで研修を受けたいということで、私が引き受けた。彼女の国マレーシアでは集中豪雨が年中あり、洪水に苦しんでいる。そういう自然災害を防ぐために、国内に気象レーダーのネットワークを作って予報のシステムを作り上げたいというのが彼女の希望だった。レーダーのことは何も知らず、見たのも初めてではないかと思う。レーダーとはこんなものという基本的な知識と操作を教えた。われわれのところのものは大気レーダーで、彼女が必要なのは気象レーダーなのだが、隣に京都大学防災研究所があり、そこで気象レーダーを使って洪水の研究をしている研究者がいたので、彼女をそこに紹介した。彼女の今回の滞在は、研究をしたというよりは、必要な知識・情報を集めたといえるが、今後の彼女の目的のために役に立つのではないかと思っている。

「生存圏」とは何か

さて、私の所属する京大大学生存圏研究所（Research Institute for Sustainable Humanosphere）だが、「生存圏」というのはあまり聞きなれない言葉だと思うので、それを説明している研究所のPRビデオを見ていただくことにする。——「世界人口の急増ならびに産業発展にともなうエネルギー・資源不足、さらに地球温暖化で代表されるグローバルな環境変化が21世紀の重要な社会的課題となっています。生存圏研究所は京都大学が法人化された2004年に発足した研究所です。大気圏、宇宙圏、森林圏、生活圏から構成されている領域と空間を人類の生存に必要な生存圏（Humanosphere）としてグローバル

にとらえ、その状態を正確に診断し、現状と将来を学術的に正しく評価し、さらに治療、修復を行い、持続可能なものにしていくことを目指しています。・・・当研究所には国内外に研究施設が多くあり、それらは世界の研究者が利用できるように解放されていて、国際共同利用を推進しています。・・・」私は上の4つの圏の中の大気圏を研究する「レーダー大気圏科学分野」を担当する教授として、レーダーによって大気を測る研究をしている。

「レーダーで大気を測る」とはどういうことか

まず我々の使うレーダーとはどういうものかを説明しよう。レーダーはアンテナが1つ、送信機、受信機が1つずつのユニットでできている。強烈な電気を短時間アンテナに流し、そこから電波あるいは光を出して、大気圏から宇宙に近い所までを遠隔探査 (remote sensing) する。電波が空中を飛ぶ時に起こる現象を分析することによって、大気の様々な情報が取れる。具体的には、たとえば、①地球温暖化にも関係する大気微量成分の研究、②流星・宇宙塵の立体的解明、などである。

大気レーダーと聞くと普通はパラボラアンテナを思い浮かべるが、それは気象観測用のレーダーで、ぐるぐる回って雨、台風など強い気象現象をとらえ、計測するが、われわれの使うものは、それよりさらに上空の、雲も雨もない大気が標的で、下から真上を見上げるアンテナである。そのアンテナがどのように使われているかを見てみよう。

#### 信楽MU観測所とMUレーダー



30年前(1984年)に滋賀県甲賀市信楽町神山の山頂で、直径100mの窪地に475本のアンテナを立てて、MUレーダー (Middle and Upper Atmosphere Radar (中層・超高層大気観測用大型レーダー)) を設置して観測を開始した。このアンテナから出る電波を電子的に制御することによって、アンテナのビームの方向を変えることができるので、全体が剣山のようになって巨大なパラボラアンテナと同じ働きをしている。

最初は試行錯誤を繰り返したが、うまく機能するようになったので、10年ほど前に、インドネシアに赤道大気レーダーを設置することになった。

#### 赤道大気研究への取り組み

インドネシアでは1990年代から気象観測を始め、インドネシアの研究者と共にさまざまな研究活動を行ってきた。生存圏研究所主催のシンポジウムも何回か開催し、研究発

表と交流の場を作り、国際的な研究の輪を広げてきた。これらの研究の1つの集大成として、三菱電機と共同で2001年、赤道大気レーダー (Equatorial Atmosphere Radar) を開発し、スマトラ島の赤道直下付近に設置し、観測を開始した。

赤道は緯度の低い所にあり、太陽が常に真上にあるから、気温が高く、熱射が入りやすい。太陽からの放射エネルギーが一番集中的に降りてくるのは赤道付近。特にインドネシアの赤道付近は強い対流現象が起きて、積雲活動が地球上で最も活発である。大気が上下に攪拌される現象が非常に強い。そういう所にレーダー装置を置いて観測をし始めて15年ほどになる。スマトラ島のほぼ赤道直下のところで、直径110mの場所にアンテナ560本の赤道大気レーダーを設置したが、これは感度が低いので、アンテナ1045本の赤道MUレーダーを併設した。大気レーダーとしては世界最大規模のものになり、それによって赤道大気の観測感度と機能は飛躍的に高まり、赤道大気の構造・運動の解明に大きな役割を果たしている。



#### 現在までの成果とまとめ

京都大学生存圏研究所は今までに、どのような研究成果を収めているのだろうか。①宇宙圏の部門はロケット2つを打ち上げた。私たち大気圏のグループはそれにセンサーを乗せ、ロケットが落下するまでの間に取れるデータを電波で回収して、あとでそれを解析している。②MUレーダーをはじめとする多くの大気レーダーを開発し、大きな成功を収めてきた。③小型レーダーを開発したが、それが気象庁によってウィンダス (Windas) として実用化され、日々の天気予報に役立ち、大きな社会貢献をしている。④MUレーダー技術を応用してインドネシアに赤道大気レーダーを設置して、赤道域の大気の解明に大きな役割を果たしている。⑤MUレーダーの技術を使い、国立極地研究所が南極にMUレーダー級の大気レーダーを設置しつつある。

研究所では、生存圏を持続可能なものにするという目的でいろいろな角度から研究が進められているが、生存圏のほとんどのことがまだまだ解明されていないというのが現実である。私としては「レーダーで大気を測る」場合の観測技術の改良を研究したり、他の観測手法を組み合わせたりして、より良い方法を発展させたいと思っている。どうもご清聴ありがとうございました。

お話が終わり、お茶を飲んだあと質疑応答の時間に移った。ある人が後で、「まるで雲をつかむようなお話だったわね」と洒落た比喻を使った感想をおっしゃっていたが、全くその通りで、「レーダーで大気を測る」というあまりに想像を絶する世界のことだったので、皆さんからはしばらく沈黙が続いたが、やっと人心地を取り戻して、質問が始まった。

①「機械が故障したらどうなるのですか」という質問に対しては、アンテナの数が多いから、中にはノイズを出す場合もあるが、故障が発見されるとそのアンテナの電気を一時止めて修繕する。しかし多くの中の数本なので、全体にはあまり影響がない。そばに発電所があり、そこから全体に送電しているので、そこが止まると大変だが、そのバックアップ・システムは完全にできているので心配はない、とのことだった。アンテナの数が多いので、その維持・修理は大変だそうである。

②「現在大気汚染が問題になっていますが、それはこのレーダーで分かるのですか」との質問には、レーダーで物質の組成を測るのは難しい。私たちのレーダーは主に動きを測るものなので、組成の場合は、実際にそこまで行って採取して来るなどしない限り分からない。光を使うと、特定の物質が特定の光を反射したり、吸収したりすることがあるので、可能な場合もあるが、われわれの場合はそれはやっていない、とのことだった。

③「最近世界的に異常気象が頻発し、また地球温暖化現象が言われていて、IPCC（国連気候変動に関する政府間パネル）は、この世紀末までには気温が6度も上昇するとの予想を出していますが、それをどうお考えになりますか」との質問に対しては、なぜあんな風にちゃんとした数字を出して言えるのかな、と少し疑問に思っている。あのグループは警告を出すのが仕事なので、強めに言っているのではないかと思うが、歴史的にみると、地球の温暖化・寒冷化は、むしろ太陽の黒点の活動に左右されているという事実があるから、そう簡単には断言できないように私は思う、とのことだった。先生は、もっと長いスパンで、そしてさまざまな要因を取り入れながら考えたほうがよいと、地球温暖化を単純に断定することには否定的な口ぶりだった。

④「女子学生はこの分野にはどのぐらいいるのでしょうか」という質問に対しては、気象情報会社ウェザーニューズに入社した大学院卒業生がいるが、修士の卒業生で東京三菱UFJ銀行に入社が決まっている女性もいるし、さまざまではないだろうか、というお返事だった。やはり専門を続けるのは難しいのではないかとの印象を受けた。気象予報士の資格を大学の2回生でとっている女性がいて、その人が自分たちの大学院にきてくれば良いと思っているとのことだった。

☆☆☆☆☆

以上、京都大学生存圏研究所のこと、そこで先生がなさっている研究についてのお話を聞いた。この研究所は多種類の研究を包括していて、先生のレーダーで大気を測る分野以外に、たとえば、宇宙圏の分野では2回もロケットを発射しているし、一方、森林圏の分野では木材の腐敗、害虫などの研究が行われている。そしてそれら多種類の研究の全部が、この生存圏を持続可能なものにするという共通の目的を持ってなされていて、ある意味ではわれわれの生活に直接関係していると考えれば、改めて非常に興味深いお話だった。

以前に、電気器具などに使われていたフロンガスが廃棄され蒸発して、それがオゾン層を破壊し、いわゆるオゾンホールがたくさんでき、そこから有害な太陽光線が直接人間に当たり皮膚がんを誘発するということで、フロンガスの使用が禁止されたが、禁止によって今ではオゾンホールは自然に修復され、問題は解決されている。そのように、近代文明によって行われるさまざまな自然破壊が、研究者の皆さんの地道な研究によって修復され、持続可能な地球環境が取り戻されることを心から願って、山本先生のお話に厚くお礼を申し上げた。

## 2. 第1回例会講演要旨

「近年の京都市の文化政策と事業について—受け継ぐことそして創ること—」

講師：奥美里（京都市文化芸術担当局長）

2014年6月28日



奥氏は、中川支部長が京都市役所の都市計画部長だった時に係長として、3年間仕事を一緒になされた。また中川支部長が、京都市役所内で係長以上の役職に就いている女性で構成される「三角の会」を立ち上げて、男性中心社会の中で生きていく問題を話し合う場を作ったが、支部長が初代会長で奥氏が最初の1年幹事を務められた。そのようなお二人のご縁があり、今回お話をさせていただくことになった。以下、奥氏のお話の要約である。

☆☆☆☆☆

### 自己紹介

私は大学では日本建築史を専攻し、文化財の勉強をして、昭和54年に市役所に建築の技術職として採用された。それ以来ずっと、主として、公共建築物の設計、建築指導行政、地域の町づくりなどにソフトとハードの両面から携わってきた。たとえば、左京区の花背山の家、地域の文化会館、保育所、児童館、老人施設、学校、公衆便所の小さいものまでを手掛けた。平成16年、河原町五条の「ひと・まち交流館」の地下にある「景観町づくりセンター」の次長となり、京都に残るいわゆる京町家の再生・保存の仕事を通して、地域の町づくりのお手伝いをするようになる。そこで役所に入って初めて、純粹の文化財ではないが、自分が昔勉強した日本建築史にかかわる仕事に戻ることができた。

6年前に二条城事務所長に就いたが、そこでは国宝や重要文化財の修理・管理などに携わり、文化財にかかわる仕事ができたとすることで非常にうれしかった。その後は町づくりの仕事に戻ったりしながら、一昨年文化芸術局文化芸術推進室長になり、昨年文化芸術担当局長になった。この仕事は、京都市の文化芸術全般にかかわる政策を立案・施行する部署で、文化財を守ることと、無形文化遺産を守るという2つを所管している。今日は、主に京都市の文化芸術の現状と京都市のそれに対する取り組みについてお話をしたい。

### 京都とはどのような町なのか

他の都市も同様の文化政策はもちろん持っているが、京都は特別だと思う。1200年の間みやこだったということで、京都には信じられないほど多くの文化遺産、文化芸術が存在している。神社仏閣の多くの大本山が京都にあり、また、能、狂言、日本舞踊、茶

道、華道など伝統芸能の多くの家元が京都にある。多くの歴史的な大変動にもかかわらず、そのつど蘇り、日本の文化芸術の中心地として、京都は、世界にも類を見ない都市として続いてきている。

## 京都市文化政策の歴史

京都市の文化政策について少し述べると、昭和16年に市役所に文化課ができる。戦後はいち早く、多くの文化施策に着手し、昭和53年に「世界文化自由都市宣言」を行い、平成18年には「京都市文化芸術都市創生条例」を施行した。これは、京都市が、広く世界と文化的に交流することによって、優れた文化を維持し、永遠に新しい文化都市であることを理想として作られたものである。基本理念としては、1) 文化芸術が日常生活に溶け込み、市民がそれを楽しんでいる町、2) 文化財の保存・活用に対する市民の支援の輪が広がり、文化財が社会全体で守られ、地域の活性化につながっている町（例えば、祇園祭が良い例）、3) そして、その「和の文化」を世界に発信する町、そのような町づくりである。

「条例」は平成19年から10年計画で実行されているもので、今年はその前半期が終わった年にあたる。その間の社会経済状況はどういうものだったかという点、1) リーマンショックに始まる世界的な金融危機、それにとまなう京都市の厳しい財政事情、2) 人口の減少と少子高齢化の進行、3) ICT（情報通信技術）の急速な発展に伴う世界的規模の交流の活性化、4) 東日本大震災による社会全体への影響などがあげられよう。

### 「条例」前半期の取り組みの成果と見えてきた課題

そのような社会・経済状況の中で、京都市の条例はどのような成果を上げただろうか。また、見えてきた課題はどんなものだろうか。

1) 将来的には国立京都伝統芸能文化センター（仮称）を設立するという目標を持っているが、そのイメージを明らかにするモデル事業として、「京都創生座」を立ち上げ、そこでさまざまな伝統芸能の舞台公演を実施することで、新たな観客を開拓してきた。また、源氏物語千年紀事業に取り組み、多数の催しを行った。

2) 学校の跡地を利用して映画を上映したり、子供に文芸の楽しさを教える「ようこそアーティスト 文化芸術特別授業」を実施し、学校、児童館などにさまざまなアーティストを派遣して、子供が文化芸術に親しみ、楽しさを知る試みに取り組んだ。ひと昔前には、子供はごく自然にお茶、お花、日本舞踊などの習い事をしていて、先生もたくさん町中にいた。しかし今は子供は授業ではじめてお茶、お花に接する。また、家に和室のない子供も多い。





3) 京都に芸術大学は多いが、卒業生はほとんどが東京に出ていく。京都に住んでもらって、制作発表できる場がないものか。その取り組みの1つとして、烏丸四条上がる西にある明倫小学校の校舎を使って作った「京都芸術センター」で、若手芸術家に場所を提供することで、若手芸術家育成・活動支援を行った。また、町づくり委員会は、京都には空き家になっている町家が多いので、若手のアーティストが住めて、制作できる場所として、その斡旋をしている。

4) 文化ボランティアなど市民参加による文化芸術都市づくりを目標に、たとえば、「キャンパス文化パートナーズ制度」を創設し、会員大学の学生が京都にいる間に、彼らが京都都市文化施設を利用するときの特別割引(100円)をしている。

以上のような取り組みをしてきた5年間に、特に次のような課題が見えてきた。1) 伝統芸能文化を受け継いで、次世代に継承する人材の育成の早急な取り組みが必要。2) 市の方からの情報発信が必ずしも市民にうまく伝わっていない。そのシステムの改善が必要。3) 市の所有している文化施設には老朽化が目立つものも増えているので、それらを再整備することが必要、などである。

#### 「条例」後半期の具体的な取り組み

上の課題のなかで、「文化施設を充実させる」に重点を絞ってお話をしていきたい。



#### 二条城

私が所長をしていた二条城は京都市所有で、市が管理している。1867(慶応3)年、徳川慶喜はここで大政奉還の意思を発表し、以後は皇室の離宮として使用されていたが、1939(昭和14)年に宮内省から京都市に下賜された。二条城文化財は、国宝6棟、重要文化財22棟、障壁画1,016枚があり、二の丸庭園は小堀遠州作で特別名勝に指定されている。1994(平成6)年に世界遺産に登録された。桜の頃は夜間ライトアップされ、非常に美しい。清流園では結婚式を挙げることもできる。年間150万人の入場者があり、黒字であるが、国宝、二の丸御殿など文化財建造物などの本格的修理を行っていて、莫大な資金が必要なので、「世界遺産・二条城一口城主募金」を募っている。(一口一万円の寄付をすると、特典として、徳川慶喜が大政奉還を発表した場所に座ることができる。)募金箱も置いている。二条城にいらっしやった時は、どうぞご協力をおねがいします。

## 京都市美術館

この美術館は、昭和8年に昭和天皇のご大典を記念して造られた日本で2番目に古い大規模公立美術館である。昨年は美術館開設80周年記念の年だった。主な収蔵作品は、明治以降の京都を中心とした日本の近・現代美術で、各種展覧会、外国展覧会が開催され、近・現代美術の拠点として大きな役割を果たしている。年間70万～120万人が訪れる。オリンピックはスポーツの祭典だが、実は文化芸術の祭典も必ず一緒にやらなければならない。それを東京だけでやるのではなく、全国でやってほしい。特に京都は色々なことをやってほしいという要望もあるので、市美術館を何とかその時までには再整備したいと思っている。これにも多大な財源が必要なので、今それで頭が痛い。

## 京都市コンサートホールと京都市交響楽団

京都コンサートホールは平成7年クラシック専門のホールとして北山に開館した。京都市交響楽団はこのコンサートホールを拠点として活動しているが、自治体が運営している全国で唯一の交響楽団で、団員は市職員である。定期演奏会は16回続いて完売で、当日券が買えないという苦情も多い。来年から年2回の定期演奏会を考えている。この3月に東京のサントリーホールでの公演は1月前に完売だった。来年20年ぶりにヨーロッパ公演を行う。日本での実力は現在ではN響の次、あるいはもしかするとN響に負けないかもしれない。市内の小さなホールに楽団員が出かけて行って、「オーケストラ ディスカバリー」と題する小規模で親しみやすいプログラムの音楽会も開催している。

## 京都会館（ロームシアター京都）

京都会館は昭和35年、京都の文化の殿堂ということで、モダニズム建築として建てられた。岡崎界限で、京都近代美術館、府立図書館、京都市美術館などと形成する景観の重要な一部を占めてきたが、この50年間で老朽化が進み、また、コンサートホールが北にできたので、ここは音響が悪いということで、舞台や講演会場として使われることが多かった。

今回建て直すにあたって、二条通りに面するプロムナードと第2ホールは保存して、第1ホールについては、老朽化が激しいので、コンサートホールが北にあるということで、バレエ、オペラ、その他さまざまな舞台芸術の上演ができるような、4層バルコニー構造で約2000席のホールに作り替える。戦後の建物として保存を要望する声がたくさん来ているので、全体の半分以上と中庭を残し、モダニズムのデザインを継承しながら、京都の文化の伝統を示す建物として復活させようとしている。平成28年7月にオープニングを予定している。株式会社ロームから、ロームという名前を50年間使う命名権（name right）料として50億円をもらうので、50年間は愛称として「ロームシアター京都」を使うが、正式には「京都会館」である。

## 京都市動物園

市動物園もリニューアルが終わり、再出発している。動物園でも「餌代サポーター制度」があり、気に入った動物の餌代として寄付をすることができる。また、「ゴリララーメン」というのを売店で売っていて、1袋買ってくれれば、動物園に2円入る仕組みになっている。動物園にいらっしゃった時はどうぞご協力ください。

## 最後に

私の仕事から、お金のことばかり申し上げたが、最後に申しあげたいのは次のようなことである。——京都では、人々の暮らしの中で文化芸術が継承されてきた。多くの寺社があり、多くの伝統芸能を担う人材が輩出されてきた。お花、お茶、伝統産業、町家、おぼんざい、地蔵盆、祇園祭などが連綿と続くことで培われてきた豊かな社会基盤の上に、他の都市にはない悠久の歴史が流れている。その中で、私たちがしなければならないのは、無形文化遺産をしっかりと守りながら、未来を担う子供たちへ教育の場を通してそれらを伝えていくこと、そして、伝統行事などを含めた文化芸術による地域の町づくりを、市民をまきこみながら発展させていくことだと思う。ご清聴ありがとうございました。

☆☆☆☆☆

出席者はほとんどが京都に住んでいて、京都の文化に対する深い関心を持っているので、奥局長のお話を興味深く拝聴した。お茶の後、質疑応答の時間に移り、いくつかの質問が出されたが、その中のいくつかを上げてみよう。

1) 「国宝とか重要文化財に対する国の補助はどうなっているのか」という質問に対して、国宝、重要文化財の場合は2分の1を国が補助する。市の指定文化財の場合は、京都市が少しは負担しなければならないのだが、財政難で年間2千万円しか予算がないので、補助のほしい人は順番待ちである。6年後にオリンピックが来るので、今年から6年間限定で予算を年間5千万円に増やし、その文化財を公開することを条件に一定の補助をすることに決定している。清水寺のようなところは黒字だと思うが、小さな寺とか神社は入場料を取らないから経済的に苦しい。由緒ある梨木神社がマンションを建てたが、風致地区に指定されていないので、情けない話だが、禁止はできない。文化財を守るにはお金がかかるので、本当に大変である。

2) 「京町家は現在どのような状態なのか」という質問に対しては、京町家は、調査によると毎年2%ずつ減少している。それを止めることはなかなか難しい。市は使いたい人を斡旋する仕事はしているが、個人の所有なので、支援金でどんな風に修理して、どんな風に使うのかなど、財源の問題もあり、相続税の問題もあり、なかなか難しい、というお返

事だった。

☆☆☆☆☆

最近京都市は話題になることが多く、観光に訪れてみたい町はどこか、という国際的なアンケートに対して、パリを抜いて京都が第1位にあげられた。また、「和食」の素晴らしさが理解されるようになり、パリなどでは昆布だし、かつおだしのおいしさが話題になったりしている。そのような中で、奥局長の京都の文化芸術政策についてのお話は非常に興味深かった。

彼女は最近毎日新聞の「京の人今日の人：京都市文化芸術担当局長・奥美里さん」の中で次のように紹介されていた。——「奥美里さんは、祇園祭の山鉦巡行の順番を決める「くじ取り式」に立ち会い、当日(7月2日)には、山鉦が順番通りに巡行しているかを確認する「くじ改め」の奉行補佐を務めた。暑中のなか約3時間、奉行(門川市長)の隣で、えぼしをかぶった装束で儀式を見守った。女性初の大役である。」

奥局長は、その長いキャリアのなかで、「女性初」という形容詞をいくつも持っていらっしやる。——女性初の二条城所長、女性初の文化芸術担当局長、女性初の祇園祭の奉行補佐、などなど。しかし、ご友人の中川慶子支部長と同じように、肩を張ったところがなく、穏やかで、ご円満なお人柄とお見受けした。京都市役所という保守的な職場で色々な差別も経験され、役職におつきになってからも、役も年も下の男性にお茶を出したりしたということだが、自然体でキャリアアップなさっていらっしやったのだろう。最初の頃は女性は自分1人だったが、今では若い層では男女半々だということである。キャリアウーマンの草分けとして、本当に頭の下がる思いである。

京都の文化芸術政策のお話を聴いて、金融危機以来、削られるのはまず文化予算だということがよく分かった。京都という町の文化の深さと豊かさを、どうにかして維持していきたいという思いがひしひしと伝わってくる良いお話だった。私たちは十分に京都の文化を享受して来たのだから、せめて二条城に行ったときは寄付をしよう、動物園に行ったときは動物の餌代募金に寄付して、ゴリララーメンを買おう、と皆さんは思ったことだろう。

☆☆☆☆☆

講演会終了後、中川支部長から5月に東京の都市センターホテルで開催されたJAUW全国総会の報告があった。支部からの出席者は7名。5月17日(土)には支部長会と懇親

会、18日（日）の午前中に第3回定時会員総会、午後から「CSW/NGOに参加して」と題する講演と懇談が行われた。今年阿部会長の退任に伴い、中村久瑠美会長が就任、理事会のメンバーも大幅に刷新され、また組織の変更も行われて活気に溢れた総会だった。IFUWからベル会長の名代として本部スタッフのキャロラインさんの挨拶があり、講演も国連婦人の地位委員会に参加された3名の臨場感に富んだ報告とあわせて、JAUWの国際的な役割の一面が印象的だった。



### 3. 第2回例会講演要旨

「国連と女性・女兒の人権―第68回国連総会第3委員会に出席して―」

講師：鷺見八重子（国際ネットワーク委員会委員長）

2014年9月27日

#### 鷺見八重子さんのプロフィール



津田塾大学英文科卒業、同大学院修士課程修了（専攻：英文学）後、和洋女子大学に45年間勤務、2012年退職、名誉教授、その間コーネル大学、ケンブリッジ大学訪問研究員。専門は英文学（現代女性作家研究）で、編著に『イギリス女性作家の半世紀』、『マーガレット・アトウッド』ほか多数。現在、認定NPO法人国連ウィメン日本協会理事、日本キリスト教婦人矯風会理事、国際婦人年連絡会委員など、

幅広く活躍されている。JAUWでは、2004年から社団法人大学女性協会の奨学金事業の制度作りに携わり、2006～07年度田中正子会長のもと副会長を務める。現在は国際ネットワーク委員会委員長。JAUWの推薦により2012～13年に第67回・第68回国連総会第3委員会政府代表顧問として国連でご活躍になった。今回の講演は2013年10月7日～11月1日間に開催された第68回国連総会第3委員会に政府代表の1員として出席された時の報告である。

#### 市川房江と国連NGO国内婦人委員会について

国連は政府間会議であるのに、何故NGOから女性代表が出席するのかというと、国連NGO婦人委員会は当時参議院議員だった市川房江の尽力で1957年8月に設立されたもので、国連憲章に示された目的を実現するため次の運動を行うとしてあげられた4つの項目の中に、「国連関係会議への代表にNGOの女性を加えるよう政府に申し入れる」というのがあり、その申し入れが取り入れられたのである。どれだけ市川房江に先見の明があったかが良く分かる。そこに参加できる国際的女性団体のなかに大学女性協会が入っていて（他の団体としては、日本YWCA、汎太平洋東南アジア婦人協会、日本女性法律家協会、日本女医会など8団体）、藤田たき津田塾大学学長・JAUW会長が初代から連続して3回代表を務めた。その後代表を務めたJAUW会員（ほとんどが会長）は、中村道子、山崎倫子、伊東すみ子、野瀬久美子、江尻美穂子、青木怜子、房野桂、鷺見八重子である。他国に例のない素晴らしい制度だと評価されている。

#### 国連第3委員会とは

日本国連代表部には56人の外交官が勤務している。国連への拠金は年2億7650万

ドル、国連予算の10%を占め、1位のアメリカについて2位である。国連第3委員会は国連総会を補佐する6つの委員会の1つであり（たとえば、第1委員会は「軍縮、国際安全保障」を取り上げる）、国連執行部と加盟193ヶ国によって「社会・人道・文化」にかかわる10項目の議案が毎年討議される。たとえば2013年は、日本は、1）「社会開発」、3）「女性の地位向上」、4）「子どもの権利促進と保護」、5）「先住民族の権利」、6）「人権の保護・促進」の5項目に関して、担当外交官が日本政府のステートメントを読み上げ、日本での1年間の取り組みの結果を発表した。3）「女性の地位向上」では、女性の地位向上と能力開発、女性の健康・保健などについて3年間で30億ドルの支援を国連に送ったこと、「女性に対する暴力撤廃基金」に100万ドルを支援したこと、日本政府は「女性が輝く社会」を目標に掲げ、男女が仕事・子育てを両立できる環境整備、M字カーブ解消、就業率アップなどに取り組んでいる状況を報告した。また4）「子どもの権利促進と保護」では、日本の子どもの貧困率は、非就労のひとり親の場合、平均61.6%に対して52.5%だが、就労するひとり親世帯の場合、平均21.3%に対して54.6%と非常に高いことを指摘し、母子世帯のワーキングプアの典型で、女性の貧困の解消なくして子供の権利保護はあり得ないという観点から、その解消に様々な施策を通じて取り組んでいると述べた。

韓国の場合は、本国から、若くて美しい女性のジェンダー平等家族省大臣が出席して、慰安婦の問題を持ち出した。彼女たちは高齢になり、数も少なくなっているが（10数人）、1人1人に面接して聞いたところ、「時は限られている。」「日本国家として真摯な謝罪が欲しい。」「個人の人権を守るのが国家の使命ではないのか。」と主張していると、真っ向から日本を非難してくる。2012年には同じことを北朝鮮が日本に対してやってきた。拉致問題を非難されたのだが、どこ吹く風で、それを慰安婦の問題にすり替え、日本に対する非難を繰り返してくる。ステートメントの中で特定の国が非難された場合には「答弁権」が行使できるので、日本国連大使が、両国間の問題はすべて法的に解決済みとなっていると述べた上で、慰安婦への謝罪を表明し、民間の募金を活用して「償い金」を支払ったアジア女性基金の取り組みも紹介するが、オウムのように同じことを繰り返し主張する。彼らのことは周囲の人たちも分かっている、たとえば、安保理1325議長チャウドリさん（バングラデシュ）は、「いいんだ、いいんだ、国連はよく分かっているんだから。」と私たち日本人を慰めてくれる場面もあった。それにしても、美人で英語のスピーチの上手な女性大臣を戦略的に使って攻撃してくるしたたかさに対して、大人しい日本の国連大使がぼそぼそと、下を向いてペーパーを読むだけで釈明している図は、なさない限りである。

#### 今年の国連の活動

今年は、「女性・女児の人権」がテーマなので、国連では多くの関連発表があった。た

例えば、事務総長特別代表ザイナブ・ハワ・バグーラ（シエラレオネ出身）による「紛争下の性暴力」の中では、「敵対する国や民族の女性を凌辱するのは、最大の屈辱と恐怖であり、兵士の士気低下、コミュニティ崩壊をもたらす犯罪」であるとして、犯罪当該国の現場における取組強化を訴えている。イスラム国がやっていることはまさにこれである。また、事務総長特別代表マルタ・サントス・パイスによる「子どもに対する暴力」の中では、1) 子どもに対する暴力の客観的データ——子ども自身の意識と体験の調査、2)

「児童ポルノ」国際的取り組みに関する発表があった。ここでは私が、子どもに対する暴力の問題に関して客観的データがあるのか、との質問をしたところ、素晴らしい質問だ、と褒められたが、具体的なデータはないとのことだった。

2011年に制定された「国際ガールズ・デー」を記念して、「Ending Child Marriage」と題するハイレベルパネルが開かれ、バングラデシュの女性子供省大臣、国連人口基金事務総長、ユニセフ（国連子ども基金）事務総長、ニジェールの活動家などがパネリストとして参加していた。ニジェールの活動家のアガリさんは16歳の時、50歳で妻子のある男性との結婚話が持ち上がり、兄に助けを求め、1000マイル離れた非難所へ行き、奨学金を得て学校に行き、児童婚廃止の活動家になった。ニジェールでは15歳未満の9人に1人が児童婚をさせられるということである。イエーメンでは6歳で結婚、アフガニスタンではヘロインのために16歳の娘を60歳の男に売る。インドでは8歳で血縁のきょうだいと結婚、などの悲惨な様子の映像が写された。貧困、宗教、慣習、女性蔑視、性暴力などが理由で、子どもの権利が侵害されているということである。法律の制定がまず必要であるとあるパネリストは言う。

また、NGOのCSWパネル展示（Journey to School）では、リビアでは戦車砲の前を通過して学校に行く女兒、インドではスラム街で溝をまたいで学校に行く男の子、ギアナではカヤックに乗って学校に行く子どもたち、ブラジルではロバに乗って学校に行く子どもたち、などの写真があった。それらを見ると、世界中で多くの子どもたちがいかに悲惨な環境にあるか、子どもたちが教育を受けることがいかに大切かが、じかに伝わってくる。

最後に

「女性・女兒の人権」をテーマとした2013年の国連総会で、日本の課題として浮かび上がってきたのは、ジェンダー・ギャップ指数の問題である。世界経済フォーラム報告によると、日本のジェンダー・ギャップ指数（男女格差の比率）は、135ヶ国中、政治118位（衆議院での女性議員数は約8%、参議院では約11%）、経済104位、教育91位、健康34位、総合で105位である。また、「女性の活躍」の問題点としては、



女性と子どもの貧困（シングルマザーの賃金格差）がある。女性のワーク・ライフ・バランスを良くするためには、男性の労働時間短縮、妊娠・出産・育児による不利益をなくす社会環境の整備が早急に求められている。最後に、国連は財政困難に直面している。色々な問題点も抱えている。しかし国連総会第3委員会に出席したことで、加盟193か国が毎年このように集まって、英知を集め討議する現場の重みを実感することができ、世界の平和への希望をもつことができた。ご清聴ありがとうございました。



☆☆☆☆☆



国連第3委員会にご出席になった驚見さんの熱のこもった報告は、とても具体的で、興味深いお話を挟みながらなされたので、聴衆の皆さんはスクリーンのパワーポイントの画像とお話にくぎづけだった。お話しが終わって、各支部からの参加者が自己紹介を兼ねながら、講演の感想を述べたが、皆さん異口同音に、お話が興味深く、今まで遠い存在だった国連が身近に感じられたこと、驚見さんの国連での活動が素晴らしかったことがよく分かった、などの感想を述べられた。また、支部では会員の高齢化、会員数の減少が続く、あまり活気のある活動はできないが、驚見さんがこのようにお元気で活躍していらっしゃるのを見て、その元気をいただいたので、支部に帰って皆にお話をしようと思う、とおっしゃった人もいた。国際的に重要な活動をしているJAUWの側面を改めて認識したとの感想もあった。

国連は財政難だし、常任理事国の利害が対立して、しばしば機能不全に陥るので、存在が本当に必要なのか、疑問視する人もいるが、驚見さんのお話を聞いて、やはり必要な組

織であり、その活動によって少しずつ世界の改革はなされているのではないかと思った。一番印象に残ったのは、若くて美人の韓国のジェンダー平等家族省大臣が、上手な英語を駆使して慰安婦問題で日本を攻撃してきた時、それに対して日本国連大使が、下を向いてペーパーを読むだけの釈明をしている映像で、それを見た時は本当にかっかりした。韓国の女性が強制的に日本の官憲によって連れ去られ、慰安婦にさせられたという吉田証言が虚偽だったということ、虚偽だったことが分かってから32年間放置しておいて、今年やっと朝日新聞がそれを認め、謝罪し、社長が引責辞任をした。政府はそのことを国連で報告したり、色々なところで誤解を解く活動をしているが、国連で働く外交官も、上役の顔色ばかり見て事なかれ主義で済ましていないで、国家の名誉回復のために戦う気概を持ってもらいたいものである。

今回の鷺見さんのお話で、世界の女性・女兒がいかに悲惨な環境にあるかを、改めて認識した。今年ノーベル平和賞はパキスタンのマララ・ユスフザイさん（17歳、「女子に教育を」という運動をしていて凶弾に倒れたが、奇跡的に助かった）とインドのカイラシュ・サティアルティさん（児童労働から80万人以上を救った）が選ばれたが、国連のこの女性・女兒の人権活動が注目されていたからだろう。日本の女性・女兒の問題の改善・解決もこれを機に加速してもらいたいものである。良いお話を聞かせていただいて、今後の鷺見さんのさらなるご活躍を祈りつつ、閉会となった。

閉会のあと、鷺見さんが新幹線でお帰りになるので、その時間まで、京都駅前のタワービル3階のレストランで、有志が鷺見さんを囲んでお食事をご一緒した。大阪支部からは2名が参加なされた。鷺見さんは講演を含めて長時間おつきあい下さったが、お疲れの様子もなく、背筋をピンと伸ばしたまま、歓談していらっしゃったので、皆が感心することしきりだった。有意義なお話しに心から感謝を申しあげて、お別れをした。

#### 4. 第3回例会講演要旨 「京都市動物園の見学」

2014年11月19日

京都市動物園は1903年（明治36年）に日本で2番目の動物園として開園した（一番古いのは1882年（明治25年）年設立の上野動物園）。昨年2013年に110周年を迎えている。2009年度に作られた「京都市動物園構想」をもとに、都心から近い、動物との距離も近い、動物たちが楽しく暮らす、ワクワクするような動物園を目指して、現在整備を進めている最中である。全体の3分の1は工事中だったので、見られない箇所もいくつかあり、少し残念だった。このリニューアル計画は2年後の2016年の完成をめどにしている。また、私たちの行った2日前にラオスから4頭の象が到着していたが、一般公開は来年3月ということで、これも残念だった。

動物園では、現在およそ130種、530点の動物を飼育している。この動物園の特徴としては、繁殖に力を入れており、日本初の繁殖成功例がたくさんある。——ライオン、トラ、ニシローランドゴリラ、シロテナガザル、クロエリハクチョウ、ベニイロフラミンゴ、フロリダニシキヘビなどである。特に、ローランドゴリラでは日本初の繁殖に成功しただけでなく、日本で唯一の3世代飼育に成功している。また、チンパンジーの研究で世界的に有名な京都大学と連携して、チンパンジーの「心の進化」の研究を続けている。このように、野生動物の保全にむけた種の保存・研究や環境教育という役割を果たすために「生き物・学び・研究センター」を立ち上げ、動物図書館・展示室・視聴室を充実させるべく現在整備中である。

私たちは二条通りに面した入口から入り、まず「もうじゅうワールド」で小型から大型までのネコ科を展示しているエリアに行き、ライオン、アムールトラ、ツシマヤマネコを見た。一行のなかには猫好きが多く、大いに盛り上がった。檻は全面ガラス張りで開放的。屋上には下から見える空中通路があり、運がよければ、そこを歩いている姿が見られるとのことだが、残念ながら、みな檻の中でゴロツと横になり、気持ちよさそうにお休みだった。絶滅危惧種に指定されているツシマヤマネコも小屋の下に潜り込み、そっぽを向いていた。ここがお気に入りの場所で日中はほとんどここで過ごしているそうだ。その現在の生息数は推定で70～100頭で、園では今後は繁殖に取り組み、種の保存に協力していく予定だということである。

さらに道を西に進むと、「京都の森」なのだが、これは現在整備中で、2015年夏にオープン予定である。これが完成すると、京都の森のなかで日本産の動物、たとえばホンダギツネ、ニッポンツキノワグマ、ホンダフクロウ、オオサンショウウオなどが飼育され、二条通りに沿った広大なエリアで、四季折々に美しく変化する森と相まって素晴らし

い京都の自然が楽しめるようになる。これに続く、東端の「象の森」も整備中で、2015年春に完成予定である。ラオスから到着した4頭の象もその時にお披露目される。

次に「熱帯動物館」に入る。そこではジャングルの木の上で暮らすナマケモノ、湿地で過ごすカピバラ、水辺のワニ、カメ、ヘビ、イグアナなど、多くの両生類、爬虫類、夜行性動物が様々な生態をみせて展示されていた。また、コンゴウインコなどの色鮮やかな熱帯の鳥類もケージの中にいた。進化の過程で、環境に適応する変化をしてきたことは分かるが、何故熱帯の鳥はこのようにカラフルなのだろう、何故カメの甲羅の模様があのよう  
に細かく違うのだろう、などと皆で話し合っ  
て、自然の不思議さに改めてただただ驚いた。

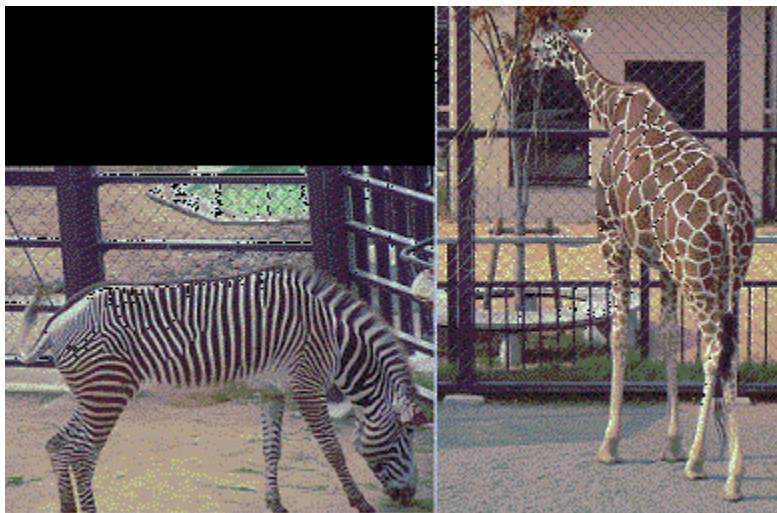


次に「サルワールド」へ。人間と同じ祖先をもつ仲間たちとの出会いである。

類人猿のゴリラ、チンパンジーと猿類のフサオマキザル、マンドリル、ワオキツネザル、シロテナガザル、アカゲザルの7種が展示されている。ゴリラは3頭ともここで人口飼育されている。研究・調査用に、チンパンジーには学習室があり、勉強したり、道具を使って餌をとったりする様子を見ることができる。マンドリルは、鼻筋と鼻下とが真っ赤で、その両脇には青い隆起が6本走っている特徴的な顔をしていて、ワオキツネザルの尾には白黒の輪の模様がある。何故なんだろう、とその多様性への疑問は果てしなく続く。

この動物園では京大と連携して、チンパンジーの「心の進化」の研究を続けているということである。もし論文があれば読んでみたいものである。チンパンジーに心はあるのだろうか。目や顔の表情を見ると、心はあるようにも思える。チンパンジーと人間のDNAは殆ど同じといわれる。しかし、ある実験によると、3歳の人間の子供は、目の前にその事実が存在しなくても、言葉で言うだけでそれを実行することができるが、チンパンジーの大人は、言葉で行っても、目の前にその事実がない限り、それを実行することができない、という。つまり想像力がないということで、脳の機能に決定的な違いがあるという興味深い実験である。ネアンデルタール人はホモ・サピエンスの先祖であるとか、全然関係がないとか、まだ定説はないようだが、いずれにせよ、ネアンデルタール人は絶滅し、ホ

モ・サピエンスが様々な淘汰を潜り抜けて、現在の私たちがいる。しかしその私たちが作り上げた文明がこの自然と動物を破壊し始めているというのは皮肉なことである。



次に「アフリカの草原」に進み、草原を一望できる木の遊歩道に登り、キリンが木の上にぶら下がっている餌箱から餌を食たり、シマウマがゆったりと歩く姿を見降ろした。近くで見るシマウマやキリンの模様の美しいこと。水場で水浴びをするベニイロフラミン

ゴのピンク色を楽しみ、ミーアキャットの面白い生態をガラス越しに見ることができた。

「アフリカの草原」と呼ばれる広場は2013年に広くなったそうだが、このネーミングには思わず笑ってしまい、反射的に、タンザニア共和国のセレンゲティ国立公園で、ゾウ、ライオン、キリン、シマウマなど様々な動物が、見渡す限りの草原の中でゆったりと暮らしている、テレビでよく見る映像を思い出した。

午前中ということもあって、先生に引率されたたくさんの保育園児や幼稚園児がそこかしこで、動物を見ながらキャッキョと大声を上げて楽しんでた。少子化と言われている中でこんなにたくさんの子供を見てほっとするが、彼らのあげる甲高い、やかましい歓声が頭にこたえた会員もいた。

最後に、遊歩道を歩いて「おとぎの国」のそばを通ると、そこには人と動物が触れ合うことができる「ふれあいルーム」があり、大勢の保育園児や幼稚園児がうれしそうに小さな動物を抱かせて貰っていた。レッサーパンダやフンボルト・ペンギンもそのエリアで展示されていて、それらを見ながら、東出入口のそばにある売店に向かった。動物園には、自分の気に入った動物の餌代を払ってサポーターになる「餌代サポーター・システム」という制度があると聞いていたが、1口10万円ということが分かり、それはあきらめて、皆それぞれ「ゴリラ・ラーメン」をいくつか買った。おいしいと評判のこのラーメンを買ったと、その10%が動物園への寄付になるということである。



今、北海道旭川市の旭山動物園とか南紀白浜のアドベンチャー・ワールドとか、それぞれ特徴を持った動物園が多く出てきているなかで、京都市動物園は規模も小さく、かなり伝統的な展示方法を取っているが、それは最初にしたように、「都心に近く、動物との距離も近く、・・・」という理念に基づいているもので、その基礎には京都らしく、繁殖では日本一の実績をあげてさまざまな賞を取り、また、チンパンジーの研究を地道にやっているということがあり、誇りに思うべきことである。

参加者は、皆さん久しぶりに動物園に来て、多くの動物に接し、動物の多様性、進化の不思議さ、人間の作り上げた近代文明の結果、多くの動物が絶滅危惧種になっているということなど、さまざまな思いが脳裏を横切ったことだろう。

動物園を出て5分ほど歩き、国際交流会館2階のフレンチ・レストラン、ルヴェソンヴェールで、東側一面のガラス窓越しに美しい紅葉の景色を眺めながらおいしい昼食をいただいた。

そのあと、中川慶子支部長から10月に東京で行われた全国セミナーの報告があった。

## 2014年度JAUW公開シンポジウム（報告）

11月8日（土）10：30～16：40 日本女子大学 桜楓2号館

参加者 会員約80名 会員以外24名（内、京都支部からの参加者4名）

1. 今年のシンポジウムのメインテーマは「女性の自立とは」である。このテーマは今まで、いろんなところで数えきれないほど、話し合われてきたものであるが、最初に、中村久瑠美会長からテーマの趣旨説明があった。（以下要旨）

- 安倍首相のいう「女性が輝く社会」は本当に実現するか？実現のために私に何が必要か、共に考えましょうとゆったりとわかりやすい口調で話された。
- 「自己の確立」＝「自立」 思い切り働きたい、でも家庭も子育ても大切、女として当たり前の要求である。女性自身人生で本当にほしいものは何か。自立する上で女性が働くことは大切だが、働き方はいろいろあってよい。現実には女性たちは自立しているのだろうか。法律事務所\*を訪れる女性たちの悩みはいろいろ多様。
- 「女性が輝く社会」は絵空事ではないだろうか。もっと現実を見据えて、解決を図っていくことが大切。女性自身の自己の確立が前提になることを認識しよう。
- 女性の自立を支える施策として
  - ①女性のための法制度の拡充を！・・・育児介護法、労働者派遣法等々
  - ②女性の就労を阻む税制・社会保障制度の見直し・・・配偶者控除（103万円の見直し、

社会保険料（130万円）の壁をどうするか、配偶者手当の廃止問題など

③女性の自立を支援する社会環境整備

④女性の自立支援資金事業の創設

○ぜひ各支部でこれらの問題を研究テーマとして取り上げ勉強会を持ってほしいと提起された。＊弁護士の中村会長は1982年、独立して法律事務所を開所。

次に当日のプログラムのみを紹介する。（中村会長、坂本里和氏、竹信三恵子氏の講演はJAUWのHPにアップされていますので是非ご覧ください）。

2. 講話「成長戦略としての女性活躍の推進」

経産省中小企業庁 創業・新事業促進課長 坂本里和氏

3. 報告 IFUWアジア地域ワークショップ

CIR国際ネットワーク担当理事 山下いづみ氏

4. 基調講演「女性の経済的自立はなぜ進まないのか

～家事ハラスメントの視点から～

講師 竹信 三恵子氏（和光大教授 ジャーナリスト）

午後から

5. パネルディスカッション「女性の働き方を考える」

（株）愛企画 代表取締役 吉川愛美氏

（独）産業後術総合研究所 主任研究員 大矢根 綾子氏（茨城支部会員）

JAUW 副会長 梅田和子氏（当初 石塚浩美氏予定）

コーディネーター 城倉純子氏

6. 交流会17:30～19:00

（感想）

今回のシンポジウムは内容が豊富で、各講演後の質疑も活発で全体に充実していた。中村会長からも会員に具体的な研究テーマが提起され、京都支部も何らかの形で組みたいと思いました。

## 5. 京都支部新年会

2015年1月31日

新年会は、中川慶子支部長の新年のご挨拶で始まった。

元旦に珍しく大雪が降ったが、会員の皆様が良き新年を迎えられたことは何よりもうれしいことです。念頭にあたり、皆様とともに世界中が平和になるようにと願いたい。JAUWも新中村会長の下、会員拡大に向け取り組まれているが、京都支部も会員減少を食い止め一人でも会員を増やす努力をしたいと思っている。私たち現役員の2期4年間の任期はまもなく終了するが、支部活動を少しでも活発に魅力的なものにしたいと思っています。今年もよろしくお祈りします。



次に、今年は京都支部が推薦した足立博子さんが2014年度国内奨学生に選出されたので、この機会に彼女をお招きして、「遺伝子治療の研究と女性研究者の今後の展望」という題でお話しをいただいた。足立さんは京都府立医科大学大学院博士課程2年の学生で、血管新生という現象をテーマに研究を行っている方である。お話しの内容は次のようなものであった。

血管新生というのは血管が新しく形成されることである。この血管が新しくできる現象は、生体が形成される時や、創傷治癒といって、傷が治っていく時におこり、適切に酸素や栄養を運搬するという働きをしている。しかし一方で、血管新生は様々な病気にもかかわっている。例えば、ガンで腫瘍が形成される時は、局所的に異常な血管新生が促進される。そのため、腫瘍部分に酸素や栄養が豊富に集まり、腫瘍が増大していく。また腫瘍細胞がほかの組織に転移するのも血管新生が原因となっている。このように、生きていくうえで必要な生理現象が一方で病気の原因にもなる、というのが血管新生で、これは様々な遺伝子によって制御されていることが最近の研究で分かっている。

遺伝子を標的とした抗がん剤や血管新生治療薬が実際に臨床で使われているが、血管新生の全貌はいまだに明らかになっていない。私たちは血管新生のメカニズムの全容を明らかにするために、マウスの網膜を用いて網羅的遺伝子発現解析を実施した。その結果、約24,000の遺伝子の中から、血管新生との関連性が報告されていない遺伝子を5つ抽出することに成功した。この研究によって血管新生にかかわる遺伝子が確定され、新しい治療法



が発見されることが期待されている。

しかし研究の世界で、女性がキャリアアップするのがなかなか難しいということも見えてきた。自分たちの年齢だと、結婚出産の適齢期なのだが、研究のためには24時間、365日研究に打ち込んでいる時期でもある。色々難しい問題はあるが、ライフ・ワーク・バランスをうまく保って、後輩研究者のよき道しるべになりたいと思う。そして今後もさらにこの研究を追求していき、将来の医療に役立つ成果を上げたいと考えている。

足立さんのお話は、女性が仕事と人生をどのようにうまく両立させていくか、という私たちが一番関心をもっているテーマに触れる内容だったので、聞きながらその大変さに胸の痛くなる思いがした。後でお聞きすると、交際中の男性はいるとのことだったが、その人が研究職ではなく、一般の仕事をしている人なので、自分は研究を続けたいし、その彼の人生とどう折り合いをつけていくか、今悩んでいるとのことであった。しかし彼女はとても明るい性格のようなので、問題をうまく切り抜けて生きて行っていただきたいと願うばかりである。

その後、ロシアのワインを味わい、おいしいロシア料理をいただきながら話しが弾んだ。会場が6階で西に面していたので、窓からは東山が一望でき、時折雪が舞ったり、太陽がさしたり、変化に富んだ景色を眺めながらの午後のひと時だった。

ご出席になっていた野口久美子会員から、東京の大学にお変わりになるので、京都支部は3月末で退会なさりたいとお申し出があった。同志社大学アメリカ研究所助教として、アメリカ先住民の歴史を研究していらっしゃる先生には、2012年6月に「アメリカ合衆国の先住民——その歴史と現在」と題する講演をしていただき、私たちはアメリカ先住民に対する新しい視点に目を開かされた。また、先生がアメリカ先住民研究者を同志社に招聘した時は、支部の有志が講演を聴講にいった。積極的に支部の活動に協力して下さっていたので、退会なさるのはとても残念なことだが、東京でのさらなるご活躍をお祈りして、お別れを申しあげた。近々にアメリカ先住民に関する著書が出版されるということである。

昨年は御嶽山の噴火、広島土砂災害などの災害に加えて、過激集団「イスラム国」による日本人人質殺害などがあり、良い年ではなかったが、今年はどうぞいい年でありますようにと祈りながら、皆さん家路についた。

## 6. 第4回例会講演要旨 「留学生を招いてのシンポジウム」

2015年3月7日

シンポジウムのテーマは「日本に留学して思うこと」。このお世話係は、第1回の時と同じく阪田敦子さんで、彼女が所属している「カーフ (KARF)」（京都ホストファミリー協会、Kyoto Association of Host Families）に登録している4名の留学生を推薦していただいた。

出席した留学生：

- ① 中国 朱 珮恰 (Zhu Yueyi シュ エイ) 京都大学 交換留学生コース
- ② 台湾 鄭 安純 (Cheng Anchun チェン アンチュン)  
京都大学 工学部 材料工学
- ③ 韓国 朴 允姫 (Park Yun Hee パク ユンヒ)  
京都大学 文学研究科心理学専攻
- ④ オランダ Peeters Macrlies (ペータース・マリス)  
京都精華大学 イラスト科グラフィック・デザイン

シンポジウムは中川慶子支部長を進行役として、パネリストの4人にまず、何故留学しようと思ったのか、なぜ京都を選んだのか、何を勉強しようと思ったのか、ということをおのおの10分ほど話していただいた。休憩をはさんで、現在困っていること、悩んでいることはなにか、日本語についてどう思っているか、今後の目標はなにか、などについても触れていただき、その後、質疑応答、意見交換を行った。



①中国の朱さんは、京都大学の交換留学生コース在籍。

私は、京都大学の交換留学生制度に応募して合格し、2014年9月に南京大学から来日しました。私が日本を留学先を選んだのは、ずっと日本文学に関心があったからです。現代文学では川端康成、三島由紀夫、古典では枕草子、源氏物語などを読んでいます。日本文学の中に描かれている人間同士の繊細な感情、自然に対する深い感受性などに関心があります。

日本と中国は歴史的に非常に近い関係にあり、色々共通点もありますが、来てみると非常に違っていると感じました。日本に来た時の最初の印象は、日本は清潔で美しいということです。また、京都は歴史的な町で、漢王朝時代の首都、長安のような町だと思いました。古い歴史的な建造物が良く保存されていますが、中国では殆ど壊されています。また

日本人が古い伝統を大切にするのも感心しました。色々な機会に日本人は着物を着ますが、中国ではそんなことはしません。日本料理も少し習っています。器も盛り付け方もとても美しく繊細です。いくつかのところに旅行もしましたが、それぞれの町が清潔で、伝統を大切にしているのが印象に残りました。

京都ホストファミリー協会に受け入れてもらえて、ホストファミリーの人たちに親切にさせていただいて非常に感謝しています。今一番の問題は日本語が十分にできないことですが、日本人は親切なので、生活にはほとんど困りません。現在交換留学生のクラスでは英語を使っているのですが、クラスでも日本語が使えるようになりたいと思っています。この夏には南京大学に帰り、4回生の勉強を続け、卒業する予定です。今日本語の勉強のことで頭がいっぱいで、そのあとのことはあまり考えていませんが、このあとも日本文学の勉強を続けたいと思っています。



②台湾の鄭さんは大学工学部の出身。現在、京都大学工学部・修士課程1年生。

私は大学を卒業して留学したいと思った時、母が2か月に1度日本に来ていたので、留学先に日本を選びました。2011年来日して、1年半語学学校に通いました。当時は大阪の西成区に住んでいました。日本人は、そんな危険な所、すぐ変わりなさい、と驚いて忠告してくれましたが、ちっとも危険ではなく、人々はほかの所よりもずっと親切でした。かに専門の料理店「かに道楽」でアルバイトをして、大阪弁もわかるようになりました。

その後、工学部出身なので大学院修士課程に入りたいと思い、京大工学部の杉山教室に研究生として入り、4回生の学生と一緒に1年間勉強し、大学院修士課程の試験（日本語）を受け合格しました。今実験しているのは有機デバイス。半導体は全部無機材料のシリコンで作られています。私の研究テーマは、シリコンと有機分子を結合したもので作ったデバイスなので、今後も色々な所で使えます。シリコン半導体はスマートフォン、携帯、テレビなど、電気で動くものに使われています。しかしこれには大きな問題があって、今、携帯とかスマートフォンはだんだん形が小さくなる傾向にありますが、シリコンは無機だから、見えるサイズより絶対に小さくなりません。しかし、もし有機と無機材料が結合すれば、有機材料は分子だから、小さいナノスケールとか、もっと見えない所にも使えます。今週論文を準備して、来週学会で発表する予定です。

今工学部では私1人が女性です。工学部の学生はずっと男性ばかりできているから、女性と付きあうのが苦手。研究室の旅行、工場見学などいつも私1人が別のホテルで淋しかったです。しかし今は先生とも先輩ともうまくいくようになり、飲み会にも一緒に行きます。だんだん距離感がなくなり、しんどいけれども良い生活を過ごしています。

私の今後のことですが、いま一番悩んでいるのは研究と仕事のことです。修士課程を修了して、奨学金をもらって博士課程に進むか、あるいは企業に勤めるか、です。日本の企業は新卒を採る傾向があり、28歳が限界。私が修士コースを修了すると、27歳。今は就活の時期なので、東芝、日立、三菱電機などグローバルな会社に願書を送っています。そこに入れば、色々な所に行けるし、日本人、外国人などと一緒に仕事ができるのは素晴らしいと思います。（ここで、韓国の朴さんから、「韓国のサムソンも世界的な企業ですよ。台湾にも支店がありますよ」という”提言”があった。）10年くらいは海外で暮らし、40歳、50歳になれば台湾に帰り、台湾料理を食べて、台湾の風土の中で暮らしたいと思います。それだけではなく、留学生としての経験を活かして国に貢献したいと思っています。



③韓国の朴さんは、京都大学文学研究科の博士課程2年生。

私の専門は発達心理学です。5年前に京都大学文学研究科の研究生として6か月勉強して、博士課程編入試験を受け合格。2013年9月に再び来日しました。子供の情動理解と母親との関係を研究しています。感情表現に関しては韓国人と日本人とは非常に違います。東北大震災の時、ニュースなどで映像を見ましたが、誰も泣いていない。韓国では大声を出して全身で泣きます。

日本語に関しては、皆親切にしてくれるので、あまり困りません。銭湯が大好きなので、良くいきます。行くとおばさんたちが京都弁で話しかけてくれるので、だんだん分かるようになりました。私の趣味は歌で、自分も歌いますが、松田聖子が大好きです。歌舞伎も好きで、市川段十郎、坂東玉三郎などが大好き。この間は段十郎の芝居を観ました。日本人が感情を出す場合、それをためておいて、きれいに程よく出すのに、魅力を感じます。

日韓関係についてですが、韓国人は、日本人は韓国が嫌いだと言っていますが、来てみるとまったく違います。周りの人は全部私に親切です。人と人との関係はすごく良いのだ

けれど、政治になると反韓・反日となる。私は日本財団の奨学金をもらっています。韓国に帰ったら、日韓関係が良くなるための架け橋になりたいと思っています。

現在の研究の状況と将来のことですが、京大では博士課程の学生は海外の学術雑誌に3本の論文を載せることが要求されていますので、今はそれで頭が一杯です。博士号を取ったら、したいことはたくさんあります。韓国では乳幼児の研究をしている人が少なく、自閉症とか発達障害のある、臨床的に問題のある子供だけを研究しています。心理学というのはそういう病気だけでなく、ノーマルな人間がどうやって生活しているかを研究する学問なので、その分野の研究がしたくて、京大に来たいと思いました。京大では、「赤ちゃん登録制度」があり、2万人ぐらいが登録しています。生後3カ月から6歳ぐらいまでの子供のお母さんが、私たちが頼めば子供を連れて来て実験に参加してくれます。これは世界的に珍しい手法で、私も自分が教授になったらやりたいと思っています。

私の婚約者は相談心理学を専門にしている、今韓国で公務員として青少年の相談にかかわっています。韓国でも最近はいじめ問題、児童虐待などが増えています。私は彼と協力して民間の乳幼児・青少年相談センター、あるいは発達心理学研究センターを作るか、あるいは、教育者の夢としては、今後医療・心理学知識に対する一般人の要求が増えますから、メディアで医療情報を扱うジャーナリストを養成する機関を作りたいと思います。私はこの5月に彼と結婚しますが、日本での経験を生かして、日韓関係の改善のために何かをしたいという使命を感じています。



④オランダのペータース・マリスさんは、京都精華大学イラスト科グラフィック・デザイン研究生。

私はオランダでグラフィック・デザインを研究してきました。私は以前はオランダを含めたヨーロッパ、アメリカなどのレベルは高いと思っていました。しかしそれらはすべて同じ源流から出ています。しかし、日本やアジアのデザインは全く違います。日本は、世界のなかでデザインがとても発達している国です。歴史的には中国からの影響、近代ではヨーロッパ、アメリカからの影響を受けながら、全く独自で新しいグラフィック・デザインを作りあげています。しかしその情報の情報がヨーロッパには全く伝わってきません。それに気づいたので、私は日本に来ました。2009年に4か月間、京都精華大学でグラフィック・デザインを勉強して面白かったので、文科省の奨学金に応募し、合格して、2012年から再び来京し、研究を続けています。

皆さんはグラフィック・デザインと聞くと何を連想しますか。おそらく服飾のファッションを想像すると思いますが、グラフィック・デザインは美術工芸以外の分野の生活の中にも存在します。それは文化と深い関係があります。たとえば、名刺。日本ではビジネスで重要なもので、最初に相手に渡します。オランダではそんなことはしません。日本に来て、名刺を含めた日本のデザインの多様さ、独自性に驚きましたが、その情報が全くオランダには伝わっていません。それは何故か。オランダではデザインというと、概念 (concept) が大事だと思われています。オランダには Dutch design (オランダ風のデザイン) というのがあり、それはオランダの国としての identity (独自性) を表しているものです。日本の場合、独自で、独創的なグラフィック・デザインが多いにもかかわらず、外国に伝わっていないのは、それらを概念化して、外に発信していないからだと思います。今は情報がすごく大切なものになってきていますから、どうやって正しく責任をもって、それを発信するか。その問題が面白くなってきたので、私は日本のグラフィック・デザインを勉強して、それらを抽象化・概念化して、Japanese designとはどういうものであるかということ、オランダに帰ってからからも研究をつづけ、発信していきたいと思っています。

私は「女性の権利」という題で、外国人のための日本語コンテストに出場して、優勝しました。論文をつくるのには私の友達がたくさん手助けをしてくれました。その中で私は、オランダでは男女差別が少ないと思われているが、そんなことはなく、段々と改善されてはいるが、まだまだ女性の給料は男性のそれより少ないこと、オランダには”Father’s Day” と呼ばれる制度があるが、これは40年ほど前から始まったもので、家族でそれぞれ週に1日「父の日」を定めて、その日は父親が一日、子供の世話から家庭全般の世話をする日で、会社からは有給休暇が取れる制度であること、それをみても、男女平等がなかなか実行されていなかったことが分かると思う、ということをお話しました。

☆☆☆☆☆

お茶の時間のあと、質疑応答、意見交換に移ったが、留学生の皆さんがおっしゃっていたのは、日本語の難しさ、特に、敬語の使い方の難しさだった。しかし、中国の朱さん以外は、滞在が長く、生活面ではあまり苦労がないようなお話だった。

それぞれのお国での女性の状況なども興味深かった。中国、オランダなど男女平等と思われている国でも、やはり女性の立場が弱いのがよく分かった。韓国の朴さんのお話で、朴大統領が御姫様育ちで、女性の問題に全然関心がなく、幼稚園の数も減らされているので、最初の女性大統領ということで期待していた女性の支持が段々なくなっていっている、という話はとても興味深かった。

今回の留学生のお話しで印象的だったことは、皆さん目的意識をはっきり持っていて、修士課程、あるいは博士課程、などで日本人と互角に研究をしていらっしゃる事だった。その水準の高さにも驚いた。マリスさんの研究も興味深かった。日本人が抽象化する能力が弱いということは良く言われているが、ここにも如実に表れているのがなんとも歯がゆい思いがした。特に韓国、台湾のお2人はご自分の留学の経験を生かして、母国と日本の架け橋としての使命を果たしたいとの思いがよく分かった。隣国との関係がぎくしゃくしている今日、このような人たちが1人でも多く増えていってほしいものである。